様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：２４４０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２８４９

研究課題名（和文）大学院共通教育学術英語に関する現状と展望

研究課題名（英文）Graduate-level English for Academic Purposes courses as part of common education curricula

研究代表者
藤岡　真由美（Fujioka, Mayumi）

大阪府立大学・高等教育推進機構・教授

研究者番号：４０３５１５７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では分野横断的観点から（１）日本の大学院学術英語教育の現状把握、（２）大阪府立大学での大学院学術英語授業の実践、（３）大学院共通教育学術英語のカリキュラムモデルの提示、を研究目的とした。結果、個々の大学で大学院英語授業の内容にかなりの多様性が見られた。大阪府立大学の授業では、英語学術論文の各セクションの構成的、言語的特徴を明示的に指導するジャンルアプローチ（e.g., Hyland, 2004b, 2007）が効果的な指導法となり、加えて、教員と学生のコンテクストを中心に考えるエコロジー的視点（Tudor, 2003）が必要とされた。こうした結果をもとに、授業構築モデルを提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本の大学院教育では、近年研究公正などの共通教育の重要性が高まり、英語教育についても分野横断的な観点からの教育が必要とされる。本研究での成果は、異なる専門分野の大学院生たちを対象として、ジャンルアプローチを用いて学術英語授業の実践方法を示した点において意義がある。さらに、教員と学生のコンテクストを最重要視するエコロジー的視点を加えた点においても教育的意義がある。

研究成果の概要（英文）：The present study had three-fold purposes: (1) to understand the current situation regarding graduate-level academic English education in Japan; (2) to implement a graduate-level English course across disciplines at Osaka Prefecture University (OPU); and (3) to develop a model for a graduate-level English curriculum. Findings showed that there was a great deal of diversity in the content of different graduate English courses across universities. Regarding the OPU English course, genre approach (e.g., Hyland, 2004b, 2007), which focuses on explicit teaching of structural and linguistic features of research papers, turned out to be effective. Moreover, an ecological perspective (Tudor, 2003) adds to successful implementation of the course by emphasizing the teaching and learning context. Based on these findings, an educational model was proposed for future implementation of a graduate-level English course for students from diverse disciplines.

研究分野：英語教育学　応用言語学

キーワード：大学院共通教育　学術英語　アカデミックライティング　ジャンルアプローチ　カリキュラム　授業構築モデル

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

研究成果発表の国際競争激化にともない、研究者を目指す大学院生に高度な学術英語を指導する科目提供の必要性が増していた。本研究開始以前においては、そうした科目は各研究科内のカリキュラムの中で提供されるか、指導教員の個別指導に委ねられていた。分野横断的に大学院共通教育カリキュラムの一環として提供される実践例もあったが、その実態は明らかではなかった。

さらに、本研究者の所属する大阪府立大学においては、本研究開始の前年度に大学院共通教育の議論が開始され、研究公正科目などに加えて英語授業の議論も始まった。本研究者の研究専門分野が英語アカデミックライティングであったため、授業を担当することとなった。

２．研究の目的

本研究では、日本の大学院共通教育レベルにおける学術英語教育を研究課題とし、以下を研究目的とした。（１）日本の大学における大学院学術英語教育の現状を調査する。（２）大阪府立大学における大学院学術英語教育に関する授業を開始、発展させる。（３）上述の（１）と（２）で得られた知見にもとづき、大学院共通教育学術英語の将来的展望を考察し、カリキュラムモデルを提案する。

３．研究の方法

(1)日本の大学における大学院学術英語教育については、大阪府立大学が大学院共通教育英語科目の開始のために収集した、他大学での同様の授業科目についてのインターネットで公開されている講義概要、シラバスから情報を収集した。

(2)大阪府立大学における大学院学術英語教育については、本研究者が担当した「Academic Writing A」の授業内容について、４年間記録したノートを主たる資料とした。さらに、研究１年目の 2016 年度においては、受講生から提供された英語ライティングもデータとした。データ提供については、本研究者が所属する高等教育推進機構の研究倫理委員会にて研究承認を得て、受講生から書面にてデータ提供の承諾を得た。

(3)カリキュラムモデル構築については、研究成果において記述する参考文献から着想を得た。

４．研究成果

(1)日本の大学における大学院学術英語教育の現状

主として国公立大学 6 校における大学院共通教育カリキュラムの中での英語教育について情報収集を実施したが、内容が多岐に渡っていたため、大阪府立大学での授業と関連する、ライティングを中心としたまたは応用言語学を背景とした授業科目についてより詳細な情報を収集した。3 校を例に挙げて簡単に説明する。

国立大学 A では、「リサーチ・スキルズ」という名を冠した 3 つのレベルの英語アカデミックライティング授業が提供されていた。それらの授業に共通するのは、「研究のメインアイディアを示す thesis statement と論理的な議論の展開を訓練し、論文の Abstract または Introduction につなげる」ことであった。大学院レベルでは研究分野により内容や使用される語彙が大きく異なるのは明白であるが、学問分野に共通しているのは「論理的な議論展開」および「相手（読み手）を説得できる議論展開」であるので、異なる研究分野から成る学生に「説得できる論理展開の構築方法」を訓練するのは効果的であると考えられた。

国立大学 B では、「特殊目的の英語（English for Specific Purposes）」の名を冠した授業が提供されていた。通常応用言語学においては、「特殊目的の英語（English for Specific Purposes）（以下 ESP）」は、特定の学問・職業分野において使用される言語・語彙的特徴を明らかにする分野として理解される。しかしながら、国立大学 B においては、分野別における英語の特徴を提供するのではなく、ESP を概観し ESP 教育・学習のあり方を検討する目的で授業が提供されていた。大学院共通教育という枠組みで考えた場合、学生が自分の研究分野で必要な英語および英語に関わる活動を意識していく上で、まずは ESP という分野を知るということは必要であり、そのための授業が提供されていることは興味深かった。なお、この ESP の授業では実際に英語を使用した活動は明記されておらず、他の授業科目において、主として理系学生を対象に英語で理工系イノベーションの歴史を調査する機会、さらに別の授業において理系テキストの読解、英語プレゼンテーションと簡単な質疑応答などの活動に従事する機会が提供されていた。

公立大学 C では、「アカデミック・コミュニケーション演習」という科目名のもとでアカデミックライティング授業が提供されていた。この授業は学術的な英語ライティングの基礎的スキルの養成が目的であった。そのため、「自己紹介」に始まり、「比較・対照」「要約」などの異なるパラグラフのパターンの練習を経てエッセイに至り、さらにプロセスアプローチの概念にもとづき、ピアレスポンス活動を取り入れながら学生自身のライティングを推敲させる活動を重視していた。この C 大学における授業内容は、学部生対象の英語ライティング授業と差がないように思われ、A，B 大学の例のように大学院生に必要とされる思考・言語活動により近づけた授業内容が望まれる。

上記 3 校の例が示すように、大学院共通教育英語授業として統一された内容があるわけでは

ない。しかしながら、異なる研究分野の院生を対象にするため、個別の分野に特化した内容や英語活動を提供するものではなく、英語による研究活動の根底となる論理展開構築能力の養成、ESP 的視点の育成、様々な論理展開パターンのライティング練習という内容になるのは、大学院共通教育の特徴であると考えらえる。

(2)大阪府立大学における大学院共通教育英語授業

研究の方法で述べたとおり、本研究者が「Academic Writing A」という授業を担当した。ここでは、その内容の主要な部分をまとめる。

本授業は 2016 年度に開始され、原則博士課程前期学生を対象として 4 年間継続して毎年一学期開講された。大学院共通教育としての授業であるため、工学、理学から経済学に至る複数の研究科から学生が受講した。受講人数にはばらつきがあり、最多で 25 名、最小で 4 名、その他の年が各 9 名であった。各学生に共通する目標として、主としてサイエンス系の英語学術論文の書き方を学ぶことを設定し、教授法として「ジャンルアプローチ」を一貫して採択した。

ジャンルアプローチ（またはジャンル概念にもとづいた指導）（例　Hyland, 2004b, 2007）については、応用言語学の特に大学院生や研究者への学術的英語ライティング指導に関して、多くの研究、実践報告がなされている。ジャンル概念の根幹をなすのは、特定の言語活動を、それを生産・使用する共同体構成者との社会的文脈の中で捉え、さらにその言語活動の規則性を叙述することである。例えば、学術論文や新聞のニュース報告記事などの特定のライティングには、構成面で一定の規則性が見られる。さらに、サイエンス系の学術論文を例に挙げると、構成の他に各研究分野における語彙、構文的特徴も見られ、それらは一定の規則性つまり約束事とし理解される。それらの言語的約束事は特定の研究分野の共同体構成員の中で、書き手は新たな研究を報告・発信し、読み手はその研究の価値を評価し自己の研究につなげていき、結果としてその共同体の発展に寄与するという社会的文脈の中で実践される。大学院生はこうした学術論文での約束事を学ぶ必要があり、そうした約束事を明示的に指導するのがジャンルアプローチである。

授業では、サイエンス系論文の典型的な各セクション（例　Abstract, Introduction, Method, Results and Discussion, Conclusion）について、週ごとに構造的、言語的特徴を担当教員（本研究者）が紹介した。紹介した内容は、応用言語学の分野で出版されている本、および学術論文をもとにした（例　Cortes, 2013; Hyland, 2004a, b, 2008; Swales, 1999, 2004）。なお、専門分野間での論文の各セクションにおける言語的特徴の差にも留意し、Huang (2014) が指摘するとおり、各セクションの言語的特徴は必ず従うべきルールとしてではなく、学生にとっての学びのリソースとして提供した。さらに、教員からの各セクションの一般的特徴紹介の後、学生は自分の専門分野において選んだ複数の論文を分析し、紹介内容との一致、一致しない部分とその理由をグループまたはクラス全員に報告した。この活動は、学生の「ジャンルの意識化」につながった。

各セクションの特徴を学び終えた後、学期の後半には学生自身が各自の論文のひとつのセクションを英語で書いた。原則博士課程前期学生が対象でありまだ研究が進展していない理由により、ほとんどの学生が Introduction のみの作成であった。学生は作成した草稿（ドラフト）をもとに、授業でピアフィードバックを通じてコメントをしあい、さらに教員からのフィードバックを経て最終稿を提出した。ライティング課題の評価は、ジャンルアプローチについての主要な研究である Hyland (2004b) にもとづき、ライティングの構成面と言語的側面両方についてルーブリックによる項目化と点数化を行った。

4 年間の実践を振り返り、ジャンルアプローチの実践は本研究者にとって効果的であった。まず第 1 に、異なる研究分野の学生を対象にするため共通して理解できる学習項目が必要であったが、ジャンル研究において提供されている豊富な研究内容が大きな助けになった。第 2 に、「学生自身が自分の分野のエキスパート」という役割と期待を明確にできた。本研究者自身が英語教育の専門家であって学生の専門分野の教員ではないという事実をもとに、自分の分野の言語的特徴は学生自身で見つけてもらい、教員が教えてもらうという姿勢を一貫して持つことにより、教員が本授業を担当するにあたり当初抱えていた不安が払しょくされた。結論として、ジャンルアプローチは学術英語ライティングを初めて教える教員にとっては使いやすい教授法であると言える。以上のジャンルアプローチの教員への様々な利点は、Cheng (2018) において議論されていることと一致する。

しかしながら、本授業の不十分な点もあった。まず、研究面では受講生へのインタビューや提出したライティングをデータとした実証研究が継続的に実施できなかったことが挙げられる。大学院生は自分の研究で多忙であり、本授業以外で時間をとってもらいインタビューへの協力などは現実的ではなかった。さらに、各自の研究内容にもとづく英語ライティングの作成を課したため、研究内容公開の制限や指導教官からの許可を取るのが困難といった問題もあった。こうした問題が 1 年目に明らかになったため、2 年目からは学生からのデータ提供は求めずに研究を進めた。将来同様の研究を実施する場合には、受講生から何のデータをいかに収集するかということの熟考が求められる。さらに、教育面での今後の大きな課題としては、学生が本授業での学

びを自分の研究分野における将来の英語活動にどのように役立てるのか、またそれをどのように検証するかである。本授業でもたらされた「ジャンルの意識化」は、授業での提出課題ライティングには役立ったということが学生の授業評価アンケートのコメントからわかった。しかし、本授業内容が授業を超えて今後の学術英語活動に貢献するのか否か、またどの程度の貢献なのかについて長期的検証が必要である。

(3)授業構築モデルの提案

本研究における(1)他大学における大学院共通教育学術英語授業の実態、(2)大阪府立大学での授業実践、から得た知見をもとに、授業構築モデルの提案を試みた。当初の研究目的ではカリキュラムモデルの提案としていたが、カリキュラム全体となると大学院共通教育で提供される他の授業科目も含まれ本研究で実施した内容を超えるため、モデル提案の範囲を英語授業の構築に限定した。さらに、得られた知見から重要なことは、全ての大学に応用できる強力なひとつの授業モデルの構築は難しいということであった。そのため、授業実践のコンテクストを第１に考える視点を取り入れたモデルの提案に至った。

授業実践のコンテクストを重視するのは、Ecological perspective (Tudor, 2003) 「エコロジー的視点」と呼ばれる。Tudor (2003) によると、言語学習においては、言語教授法、最新の研究結果、教材、教育機器など広い意味での教育テクノロジーの完備が一定の学習成果を保証すると考えられがちであるが決してそうではなく、教員、学習者、教育政策決定者などの言語学習に関わる全ての参加者の諸活動全体と日々の教育実践が最重要であるとされる。さらに、エコロジー的視点から言語学習について研究を行うとすれば、教員、学習者の授業記録、感想やジャーナルなどの自然発生的な探求方法が求められる。

このエコロジー的視点に立つと大阪府立大学での授業実践について以下のことが言える。ジャンルアプローチを通じた、学術論文の各セクションの英語的特徴の明示的指導とジャンルの意識化を経たライティング作成だけが全ての大学に応用できる成功モデルとはならない。例えば、受講生は主として博士課程前期学生であり自身の研究も進んでいないため、Introduction しか作成できないことが多かった実情を考えると、将来的には Introduction を集中的に訓練する指導が望ましいかもしれない。さらに、受講生にとっては学会での英語によるポスター発表やパワーポイントスライド作成など、学術論文以外に優先的に学びたいジャンルがあるかもしれない。こうした受講生の学びたい学術英語の分野を理解することは、Needs analysis（ニーズ分析）として行われる必要がある。しかしながら、従来のニーズ分析を超えて、エコロジー的視点を取り入れた場合、教員からの学生に対するより深い学習への介入が必要とされる。

より深い学習への介入とは、学生個人の英語力、英語ライティング力を把握し、各自に適した個別指導を行うことである。例えば、学生自身が英語学術論文の書き方を学びたいと熱望していても、基本的な英語力が不十分であるかもしれない。また、学生によっては英語で学術論文を書く訓練をする前に、読む訓練が優先されるべきかもしれない。そのため、教員は学生全員に共通して指導する項目と、学生個人の英語力やニーズの違いに対応した個別指導の両方を取り入れて両者のバランスを取る必要がある。

さらに、エコロジー的視点に立つと、教員と学生両方が授業に費やすことができる時間、労力のバランスを取りながらの授業実践を行うことも重要である。大阪府立大学での授業の場合、学生の中には自身の研究活動、特に実験で忙しく、「Academic Writing A」の授業に満足に出席できず、また授業課題に時間を費やすこともできない場合もあることがわかった。また担当教員としても、他の授業準備への時間配分との兼ね合いから、学生のライティングへのフィードバックに思うように時間をかけることができないこともあった。このように、教員、学生双方の授業に対する時間的、労力的コミットメントという現実的な問題も考慮し授業の立案がされるべきである。

以上のエコロジー的視点に立ち、本研究にもとづくジャンルアプローチを中心とした限定的な大学院共通教育英語授業案を図で示すと次のようになる（次ページの図参照）。

結論として、言語学習のエコロジー的視点からは、授業に関わる教員、学生のコンテクストが最重要視され、またコンテクストは無数にあり違うのであるから、大学院共通教育英語を説明する唯一の一般化されたモデルの提示はできない。しかしながら、本報告および本研究の成果として出版した論文や実践報告を参考として、日本で大学院共通教育英語授業に関わる、または今後関わる研究者、教員が自分のコンテクストに適した授業を立案、展開することが望まれる。

なお、本研究において、他大学の大学院英語授業について十分にデータ収集ができなかったことも、反省点であり今後への課題である。担当者へのインタビュー実施、また授業観察などのより豊富なデータを収集することにより、大学院英語教育についてより深い知見が得られ、この分野の将来的発展につながると考えられる。

参考文献

Cheng, A. (2018). *Genre and graduate-level research writing*. Ann Arbor, MI: University of Michigan Press.

Cortes, V. (2013). The purpose of this study is to: Connecting lexical bundles and moves in research article introductions. *Journal of English for Academic Purposes, 12*, 33-43.

Huang, J. C. (2014). Learning to write for publication in English through genre-based pedagogy: A case in Taiwan. *System, 45*, 175-186.

Hyland, K. (2004a). *Disciplinary discourses: Social interactions in academic writing*. Ann Arbor, MI: University of Michigan Press.

Hyland, K. (2004b). *Genre and second language writing*. Ann Arbor, MI: University of Michigan Press.

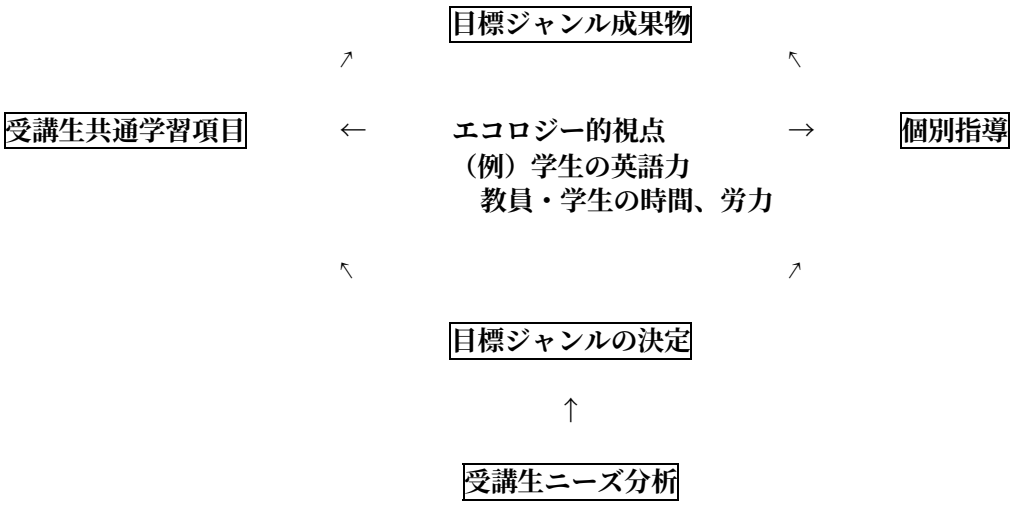
Hyland, K. (2007). Genre pedagogy: Language, literacy and L2 writing instruction. *Journal of Second Language Writing, 16*, 148-164.

Hyland, K. (2008). As can be seen: Lexical bundles and disciplinary variation. *English for Specific Purposes, 27*, 4-21.

Swales, J. M. (1990). *Genre analysis: English in academic and research settings*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

Swales, J. M. (2004). *Research genres: Exploration and applications*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

Tudor, I. (2003). Learning to live with complexity: Towards and ecological perspective on language teaching. *System, 31*, 1-12.



図：大学院共通教育英語授業構築モデル例

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 藤岡真由美	４．巻 19
２．論文標題 大学院共通教育英語アカデミックライティング授業―4年間を振り返って―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『言語と文化』　大阪府立大学高等教育推進機構	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Mayumi Fujioka	４．巻 17
２．論文標題 Second language (L2) writing assessment in a graduate-level English academic writing course	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Language Center Journal, Osaka Prefecture University	６．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://doi.org/10.24729/00005840	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Mayumi Fujioka	４．巻 16
２．論文標題 Genre-based instruction in a graduate-level English academic writing course	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Language Center Journal, Osaka Prefecture University	６．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://doi.org/10.24729/00005847	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 藤岡真由美
２．発表標題 ジャンル概念にもとづいた大学院英語アカデミックライティング指導―4年間を振り返って
３．学会等名 学術英語学会第5回研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 藤岡真由美
２．発表標題 ジャンル概念にもとづいた英語アカデミックライティング指導―理系大学院生を対象として
３．学会等名 第８回科学英語教育研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Mayumi Fujioka
２．発表標題 L2 graduate writing instruction for science students: An activity theory perspective
３．学会等名 The 16th Symposium on Second Language Writing（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Mayumi Fujioka
２．発表標題 Genre approach in a graduate-level English academic writing course for science students
３．学会等名 The 9th Symposium on Writing Centers in Asia（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 藤岡真由美
２．発表標題 大学院共通教育英語アカデミックライティング授業―理論から実践へ
３．学会等名 学術英語学会第2回研究大会
４．発表年 2016年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考